福田誠治著「子どもたちに未来の学力を――フィンランドの学力観に学べ――」
東海教育研究所 2008 年 12 月 10 日刊を読む

学力は変化するもの

１．(１)日本人の多くは、現在、そしてこれから必要とされる学力に気づいていません。

(２)日本では「勉強をすればテストの点が上がる」という思い込みがあります。事実、多くの親が子どもに「勉強しろ」とハッパをかけています。確かに勉強すればテストの点数は上がります。なぜなら日本のテストは、それまでに覚えたことを問うからです。つまり日本式のテストは、答えが前もってわかっているといういかさまに近い。

(３)そもそも、解き方がわからないから「問題」になるのです。ところが日本では、授業で解き方を教えたことを「問題」としてテストしている。誰がやっても答えは同じ。答えが一つだけ出てくるものを「問題」と呼んでいること自体、おかしいのです。つまり、「学力とは何か？」といういちばん大事なことを日本人は考えず、おろそかにしたままなのです。

２．(１)日本の学力観は「何を学んだか」を最重要視しますが、EU は学力観を「これから何ができるのか」にシフトしたのです。

(２)なぜシフトしたのかといえば、「何を学んだか」という古い学力観ではヨーロッパには生き残る道がないからです。経済の変化とともに「国民の学力」という枠を EU は超えてしまったのです。

(３)現在の EU は 27 の国、4 億 9000 万の人びとが、国境を超えて移動しています。ひとつの職場にフランス人もドイツ人もオランダ人もベルギー人もいます。そこに移民も入ってくる。そうした日常の中で愛国心を声高にいえば大喧嘩になるでしょう。伝統を問うても、一人ひとりの背景がみな違うわけですから何の意味もありません。つまり「知識・技能の国民パック」でつくられる国民像が通用しなくなったわけです。

(４)そうなると多文化・多言語・多民族が共存する「新しい市民像・新しい社会人像」を打ち出さざるをえない。ヨーロッパはそうした状態にすでに突入したのです。国を超える「新しい市民像・新しい社会人像」にふさわしい学力をまとめ上げないかぎり自分たちは分解

してしまうという危機感があるのです。経済力ではアメリカや日本に負けてしまう。中国の成長も強烈です。先進地域であり続けるためには、問題点を自ら見つけ出し、周囲と協力し合って解決する能力を持った人びとが構成する社会でなくてはならない。労働者の質も同様です。

(５)そうした社会を構築するための学力、それが EU がめざす学力なのです。

３．(１)たとえば PISA 調査には「リーディング・リテラシー」という領域があります。日本ではそれを「読解力」と直訳してしまい、読解力が落ちたと指摘されれば、「朝読書だ」となってしまっています。

(２)しかし読解力とは「言語を使って何ができるのか」なのであって、読書はその一部にすぎません。本当の読解力とは、言語を使って問題を見つけ、考え、人びとの意見の違いを認識し、その違いを調整してよりよい結果に導くためのものであり、社会全体の中で、人間の行為そのものを調整する力のことを指すのです。言語を使わなければ、暴力、武力がものをいいかねない。そうならないように言語を活用する力を養い向上させなくてはならないからです。

(３)PISA の「リーディング・リテラシー」という用語自体が誤っているのですが、正確には「言語情報リテラシー」としなければならないはずです。OECD 教育局のシュライヒャー指標分析課長も、「読解力とは、単なる読み書きではなく、社会的な道具を使って、社会とつながりを持つ能力を指す」と定義しています。こうしたことからも EU がめざす学力像が見えてくるのです。

P12 ～ 14

［コメント］

一人ひとりを大切にして「おちこぼれ」は一人もつくらない、伸びる子はどんどん伸ばす。このようなフィンランドの教育は学ぶべきところが多い。福田先生の一連の著作はとても勉強になる。

－ 2009 年 5 月 20 日林明夫記－